

投稿コーナー

投稿を
お待ちしております
います！

子歳諷詠

白石 凡子

(宏事)

(昭和一九年全卒)

庭前のいつもながらの初雀
土筆籠囲みて語る昔かな
振花の愚直なまでの振れかな
天領の故き道具や秋深し
石路咲いて雑木林の蘇る

歩いて遊ぶII

東京 思い出の記 (2)

本 松 茂 敏

(昭和三六年全卒)

「吹上しようぶ園から青梅丘陵へ」

東青梅駅から歩いて約十五分、
「吹上しようぶ園」に着く。
「しようぶ園」として、整備さ
れて四、五年が経っているのだろ
うか、園内はまだ、真新しい感じ
だ。

しかし、聞くところによると百
八十一種類十萬本の花菖蒲が植え
られているそうだ。

梅雨の小雨に咲く、花しようぶ
を、眺めながら散策するのもよい
花しようぶの花言葉は「優雅な
心」と聞くが、たまには、花でも
愛でる優雅な、生活の心を持ちた
いものだ。

昔から「いづれがアヤマかカキ
ツバタ」といわれるように、私に
はアヤマとハナシヨウブとカキツ
バタが、まったく区別できない。
管理人なのか、説明員なのか

「しようぶ園」の人に花しようぶ
の説明を聞きながら、その見分け
方を尋ねた。
花と葉に見分ける特徴があると
聞く。

カキツバタの花の基部は黄色を
帯び、中央に白い筋がとおって
いて、葉質は幅二から三センチ。ア
ヤマの花は基部に黄色と紫の網目
模様、葉はカキツバタより細い
○・五から一センチ。ハナシヨウ
ブは基部中央が黄色、葉の中助が
はつきりしているらしい。

説明を聞いてわかった感じもす
るが、今度、カキツバタ、アヤマ
を見たときに、区別できる自信は
ない。

時間もあるので、「吹上しよう
ぶ園」をあとにして、歩くこと約
三十分、「鉄道公園」横をとお

過ぎ、青梅丘陵ハイキングコース
に足を向けた。

氷山公園の脇をとおり過ぎると、
まもなく起伏の穏やかな、歩きや
すい、広い平坦なハイキングコー
スに入る。

六月の青葉のこの山道も素晴ら
しい。

第一展望台、第二展望台、第三
展望台をやり過ぎ、やがて第四
展望台にたどり着く。疲れは感じ
ない。

ここからの展望は良く、青梅市
街が眼下にできる。

夕暮れも近づいてきたので、こ
こで引き返し青梅駅に向かい帰路
に着いた。

さらに先の尾根に行くと、辛垣
城、雷電山を経由して、軍畑駅に
たどり着くらしい。

一度歩いてみたいと思う。

菁莪つれづれ (その二)



『この名に私達の夢を託しました。
菁莪は人材を育てるを樂しむ、と
いう意味の言葉です。
私達のなかの多くの才ある人々
がすすくと育って、芳香を放ち
美しい花をつけるのを期待してこ
の名を付けました。』

「菁莪」昭和二十七年二月創刊号より
全日制文芸誌「菁莪」に託され
た夢は次々と花開いていきます。
今回は昭和二十八年に発刊された第
二号より紹介します。

聞けわだつみの声

篠原 富士雄

(当時三年)

〈前略〉この書は決して戦争反対
の烈々たる文字によつてのみ埋め
られているのではない。それより
ももつと価値のあることは、この
書が戦争にかり出され眼をふさが
れた純真な学徒達のその様な運命
を運命として無理やりに説きつけ
ようとする悲しい言葉や絶望的な
うめき声に満たされている事であ
る。〈中略〉私の望むことは、例
え手記のほんの僅かな部分に戦争
賛歌めいた思想の片鱗が仄かに見
えたとしても、読者はかえって思
いを、それを書かせた者の上に致
し、彼等のその声の痛ましさにこ
そ耳傾けて貰いたいと言う事であ
る。〈中略〉夢多かるべき学生の